

アートプラットフォーム形成のためのメタデザイン

SMFアート寺子屋

vol.1「逸脱する芸術表現」 2012年9月29日 / vol.2「仮設の知恵」 2012年11月25日

vol.3「創造性と社会性」 2013年1月12日 埼玉県立近代美術館 講堂

SMFが目標とする「アートプラットフォーム形成のためのメタデザイン(=デザインのためのデザイン)」というテーマを掲げて、3回にわたって〈SMFアート寺子屋〉を実施しました。

SMFはこれまで、多くの人びとが関わる展示やワークショップ、シンポジウムなどを展開してきました。今回の〈SMFアート寺子屋〉はそれらの企画が目指す目的、その企画の実施という私たちが直接体験することができる「企画そのもの」以外のところに何をデザインすることができるのかという、より拡がりのある視点で見出そうという試みです。それを「逸脱する芸術表現」「仮設の知恵」「創造性と社会性」という三つのテーマを通して考え、模索することを共有する場となりました。 柴山拓郎(SMF運営委員)

vol.1「逸脱する芸術表現」—考えられないことを考えられるようになること(1)

初回のアート寺子屋は、JSSA(先端芸術音楽創作学会)の第9回研究会との共同開催で実施しました。前半は、柴山拓郎・塩野衛子さん・星(柴)玲子さんによる三つの研究が報告されました(この研究報告書は同学会のHPからダウンロードできます)。

後半は、伊藤俊治さん・沼野雄司さん・

古川聖さん・松村誠一郎さん・高橋博夫さんによるパネルディスカッションをおこないました。音楽を、私たちの身体感覚全てと密接に呼応しあうパルスの集積のようなものとして、もっと大局的に捉える必要があるのではないかという問題提起をきっかけに話題が展開しました。私たちは普段、物事を無意識に紋切り型に理解しているからです。たとえば、私たちが事物を理解しようとするときに何かのジャンルにカテゴライズする傾向があり、その枠組みは既存の価値観や既存の社会制度などによって形成されています。その思考過程をどのように拡張していくのか、つまり規定の路線や制度から逸脱していくことができるのかということが創造的な思考にとって重要であるといえます。その思考を変えていくためには、日常の私たちの生活を支配している合理性を重視する姿勢を見直す必要があるということを再認識しました。

SMFが目指すアートプラットフォームが果たす役割とはどのようなものなのでしょうか。流動的な方が良いのか、あるいはおおざっぱなフレームだけを用意することが良いのでしょうか。いずれにせよ、アートに触れることを通して既存の価値観に疑いを持ち、自らが考えて行動する人びとをゆるやかにつないでいくことがアートプラットフォームを形成するうえでの

メタデザインの中心にあるということを考えさせられました。(参加者:50名) (柴山)

vol.2「仮設の知恵」—一度しかない人生を楽しむために

仮設は必要に応じてかりに設けること、必要が何らかの変化を受容するためならば応じた仮設が生じます。震災などの非常時の変化では仮設住宅が建てられ、ライフステージが変わる時の改装は次のステージまでの仮設かもしれません。ヘンなことをするアートも、あるいは日常の変化を引き起こす仮設なのかもしれないと思ったりして、だからテーマに仮設を選んでみました。講師は内田祥哉先生、3年前から方丈庵や〈き〉がわりの假具のデザインでお力添えいただいた建築家です。

講演は被災地の仮設からはじまります。その特徴は、早くでき、基礎がなく、2年間で立ち退く、従って今まではプレハブ住宅が充当されてきたのですが、先の震災では木造の仮設住宅が提案されるなど、その状況が変わってきました。では仮設はどのくらいもてばいいのだろうかと考えているうちに、先生が研究対象にされていたプレハブの中で仮設に関係があるようなものがいくつでもあることに気がつかったということです。

そこでアメリカからのモジュラーハウスを皮切りに、それをこの風土になじませたセキスイ化学のユニット住宅、集合住宅に応用した三井造船のパイロットハウス・プロジェクト、折り畳んで運ぶテラピン、車付きで移動するキャンピングカーやキャラバンと多様な事例をスライドで映し、最後に熊野川の河川敷で昭和20年代までは残っていた仮設を紹介されました。これは毎年の洪水を日常と捉え、それに備え、住まいを解体し高台に移設し、水が引けばまた戻す、「だれでも簡単に、何回でも組み立て解体を繰り返すことができる」という木造軸組構法ならではの「仮設の知恵」です。

質疑応答では、茶室と仮設、仮設と生活芸術、そして被災地でのアートの役割と話題が拡がり、消化不良気味だったかもしれませんが、仮設もただ簡易なだけではないはずだと主張したく、表題を「仮設」と正字で綴った寺子屋でした。

なお、アート寺子屋番外編として12月11日から14日まで、川口市立アートギャラリー・アトリアで、内田先生が提案する仮設の知恵「組み立て解体した組み立てられる造作」の試作ワークショップがおこなわれたことを、あわせて報告いたします。(参加者:39名)

三浦清史(SMF運営委員)

vol.3「創造性と社会性」—考えられないことを考えられるようになること(2)

アートに触れることで感覚や受容力が拡がるのではないかとvol.1のテーマをひきついで(SMFアート寺子屋)vol.3は企画されました。特にVol.3では「創造性と社会性」というキーワードに基づき、岡田猛さんと熊倉純子さんによる講演とパネルディスカッションをおこないました。

岡田さんは、人間とアートとの関わりを認知科学の立場から研究しておられます。熊倉さんは取手や北千住、北本において、まちやそこに暮らしている人びととアートを共有する取り組みをしておられます。共に、アートに関わる人間やアートを取り巻く社会という、アートを独自の視点でとらえなおす活動をしておられます。岡田さんの講演では、実験協力者に絵画を実際に描いてもらう過程で、ある程度の制約を与えるほうが創造性を発揮できるという研究を紹介していただきました。また、熊倉さんは取手や北千住、北本における活動の紹介を通して、その土地の行政や自治体などとの交渉や調整を積み重ねて形成されるプロジェクト型アートの役割について紹介していただきました。

パネルディスカッションは、講演していただ



いた両氏とともにSMF運営委員の青山恭之さん、三浦清史さん、高橋博夫さん、石上城行さんも加わりながら進めました。厳然と存在する社会のルールは、アートに関わる人びとの創造性を抑制します。そういう状況ではたびたび摩擦が起きますが、そういった摩擦こそがアートを社会に提示していくためのエネルギー源になりうるという熊倉さんの前向きな姿勢は、アートに関わる人びとを大きく励ましてくれるものと思います。

岡田さんからは、社会から与えられたものだけを選ぶのではなく、自ら制作や創造にたずさわり生活を豊かにしていく自由な人物像である「創造的教養人」を育てることがアート教育の中心的な意義として位置づけることができるのではないかと提案がありました。そして、そのためにはアート系のみならず、総合大学においてもアート教育の重要性について再確認すべきではないかというのです。

SMFもアートを通じたプロジェクトを進めながら、活動を通して得られる可能性のデザインを同時におこなう必要性を強く感じました。(参加者:48名) (柴山)

